



特集

しやべる

おしゃべりは、たぶんヒト特有のコミュニケーションのあり方。日本の都市ではまる一日おしゃべりしない生活も可能だが、人類学者はフィールドでいろいろなおしゃべりに出会っている。それぞれの社会に、上手なおしゃべり、おしゃべりのルールもある。ちよつと立ち止まって、「おしゃべり」してみませんか。

会話のダイナミズム

宇田川 妙子

「うたがわ たきこ」

先端人類科学研究部

近年、おしゃべりが、私たちの生活から失われつつあるとよくいわれる。電話や、直接会って話をするよりも、メールでのやりとりが好まれるし、物を買う場合も、自動販売機があれば、そちらを選ぼうとする人も少なくない。最近の喫茶店が、ゆつたりとくつろぐ空間から、客の回転が速いスタンド式に変わってきたことにも、同じ背景があるという人もいえる。家族内でのコミュニケーション不足については、すでにかなり前から問題視されているが、家族の外でも、いわば無用なおしゃべりはだいぶ減ってきたようだ。

ところで、こうした傾向は、しばしば現代社会の人間関係の希薄化を示しているといわれる。だとすれば、会話は、単なる情報やメッセージの授受だけを意味するものではない、ということになる。もちろん、話すという行為によって、そこで何が話されているかは重要である。しかし話が、その内容だけの問題つまり、話の内容を信号のようにやりとりするだけの行為なら、自動販売機でも事足りるだろうが、それだけで

は、やはり私たちは味気ないと感じてしまう。ほとんど内容のないおしゃべりでも、おしゃべりをするとき自分が楽しかったり、とにかく誰かとおしゃべりがしたくなったりするという経験をもたない人はいないだろう。

そもそも、話という問題にかんしては、その内容のほかに、話すという行為がおこなわれている場そのものにも注目する必要がある、と指摘する研究者は多い。

たとえば、会話には、言葉だけでなく身体全体を含めたやりとりが含まれている。私たちは、話をする際、服装や表情にも気をつかうし、ジェスチャーなども、身体も積極的に駆使している。しかも、その表情や動作は、それぞれに記号的な明確な意味があるというよりは、ただ、自分を目立たせたり、相手手をひきつけたりしようとするだけという場合も少なくない。話が、単なる情報伝達ではなく、自己表現や、相手に対する影響力の行使につながることはいまさら指摘するまでもないだろう。その際には、政治家の演説など

に典型的にみられるように、とくに身体的な技術が重要になってくる。

そして会話は、こうした身体的なやりとりを含んでいるからこそ、即興的で、ダイナミックな性格をもっている。話の現場では、相手の身体に直接向き合うことによつて、しばしばそこに予期せぬ反応を見出し、それに応じて自分の側にも思わぬ反応が引き起こされていくからである。

とするならば、私たちは、互いのあいだにすでになんらかの関係が存在することから話をするだけでなく、話をするこによつて、新たな人間関係を生み出し、これまでの関係をさらに変化・進展させたりしているといえるだろう。話すことは、それ自身が、人間関係そのものなのである。

さて実際、他の社会や文化にも目を向けてみるならば、話のこの部分が非常に大きな意味をもち、それぞれの社会の秩序や構造と密接にかかわり、ときには様式化・儀礼化されているところも少なくない。話の技術、いわば演技力が、相手を操る力、すなわち権力に

直結しているため、みながその演技力の切磋琢磨に余念がなかったり、おしゃべりのための空間が社会のなかに明確に設けられていたりする。

本特集では、その一例としてバブアニア、ニューギニア、イタリヤ、インドでのおしゃべりの場面を取り上げるが、そこからは、人びとが、さまざまな形のおしゃべりを展開しながら、自分を表現し、社会を動かしていく様子が見えてくるだろう。

そして、直接的な会話の場が減りつつある現代でも、こうした話の意義がまったく見失われてしまったわけではなく、いとも付け加えておく。たとえば、メールにはしばしば絵文字や記号が使われているが、それは、メールのやりとりにもなんらかの表情を加えようとする工夫である。つまり私たちが、人間関係としてのおしゃべりの効用を手放してはいないのである。

いまや面倒で無用なものともみなされがちなおしゃべりの意味を、こころでもう一度じっくり考え直してみる必要があるのではないだろうか。

ビッグマンの名演説

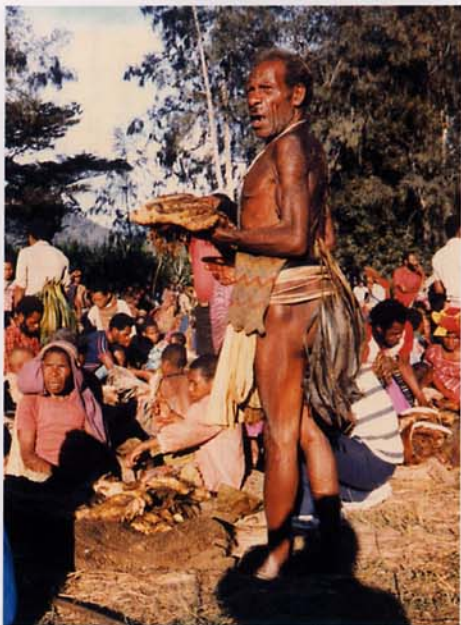
紙村徹 (かみむらとむる) 神戸市看護大学助教授

パプアニューギニア

パプアニューギニアの西部高地にあるエングラ州では、ほぼ毎日のようにどこかの広場で、部族の集いが開かれ、男たちのおしゃべりが延々と繰り返される。いつたいつ働くのだからと心配になるくらいである。いやいや、むしろこのおしゃべりが、男たちのもっとも大切な仕事なのである。そんな彼らの様子を紹介してみよう。

その日も部族の男たちは、広場に円陣を組んで座り、激しく論戦を交わしていた。円陣の外側では、女たちが三々五々集まって座り、編み物をしながら聞き耳をたてている。女たちは集会でしゃべってはいけないのである。ただあとで家に帰ったら、夫やその兄弟たちにゴチャゴチャ感想を言い立てる。そしてたいの夫たちは、うんざりする。

さて、つい先ごろまで何度か弓矢を射かけあつた、川向この仇の部族とのあいだで、一応の手打ちをおこなうために、縁組み交換をすることになった。議題はこの件をめぐる。先方からはすでに結納の手付けのブタが送られてきた。円陣のなかからウイアが立ち上がり、右手をふりあげて不満をぶちまける。「あれくらいは結納のブタで、おれの娘



去年まで仇敵であった交換相手の名をよびあげ、どれほど自分が寛大で気分がよいかを演説するビッグマン。豚肉分与祭。1985年8月、サカ谷アマコス



ハイス쿨建設用地を提供した側(右)が、謝金をめぐって不平を述べている。左のスーツとネクタイ姿の男が、ハイス쿨校長。彼はロンドン留学帰りの若手のホープ。しかし彼の比較的合理的な通った説明でも、相手にはなかなか受け容れてもらえない。1984年8月、サカ谷アマコス

を奴らにわたせつてのよかよ！」
 (ここで、とくにウイアの派閥の男たちが「カフ、カフ(そうだ、そうだ)」の合の手を入れる。これに対してすかさず別の派閥のプリブが反論を試みる。ふたつの派閥はかなり険悪な仲になっていて、いずれ分裂するかもしれないような雲行きである。
 「なにを言ってるんだ。おれは先の合戦で兄弟三人もやられたんだ。結納の

額なんぞよりも、まずは戦死者の賠償問題を先に片付けてくれなけりやあ、(少し間をおいて)死んだ兄弟が祟るぞ！おれたちが死んでもいいつてのよかよ！」
 超リアルストであると思われたエングラ人が、意外や意外、死霊の祟りをだされると、一同がくりとうなだれる。「どうしよう」「ああ」などというため息があちこちから漏れてくる。しかしこれも説得術のひとつであるらしく、プリブ

は満面の怒りと恐れに混じった表情とは裏腹に、冷静に計算して「死霊の祟り」を引き合いにだしてきたものと考えられる。
 しばらく沈黙が続いてから、どちらの派閥にも属していないケンラが、おもむろに立ち上がりて茶々をいれる。
 「おい、おい、プリブよ。戦死者賠償問題なんて、そんなに早く片が付くとも思っているのかよ。ウイアの娘なんぞぞ、

もう奴らの槍に串刺しにされてしまったというじゃあないか。だから早めに結納を取り交わした方がよかあないか」

谷じゅうに、われらの力をみせつけてやらねばならない。そのためには、なんとしてでも川向この奴らとのブタの繋ぎ紐を真直ぐにしてやらなくちゃあならないのだ」

女たちは決して声を発しないが、名演説に対しては眼差しと表情で称賛をありありと示す。実は村人をうならせたのは、カラベの提案そのものだけでなく、その名演説も含まれてもいる。カラベこそ、その卓越した演説力ゆえに、当地で自他ともにビッグマンと認められて

「性的関係をも」という意味の噂である。しかも女から男への求愛ソングでよくつかわれる。この種の論戦では、ことに噂がよく使われる。論戦の緊張を和らげるためかもしれない。
 とはいえ、これにはウイアが怒って息を荒げつつ立ちあがり、吼えてみせる。「冗談じゃない。おれの娘に限って、そんなふしだらじゃあないわい」

このようにいこうに論点がまとまらない論戦が続く。何日にもわたるので、見ている方も疲れてしまふ。それでも半年くらい論話し合えば、徐々にお互いがついてくるらしいのである。このあたりの勘どころがわかりにくいのが、この場合はカラベの提案がもっとも説得力を発揮した。
 「たしかにウイアの言うこともわかる。プリブの言うところも、まさにそうである。しかし皆の衆よ、われら一族はいまだ弱い。先の合戦では三人も戦士をなくした。ここは我慢だ。しかも大祭宴も間近だ。われらはこれに恥をかいてはなるまいぞ。大祭宴をやりぬき、この

がまもなく開催する大祭宴で供与するブタを、できるだけ多く確保しておくことが、まず必要だからである。
 誰もが認めるような、うならせる名演説には、男たちは目ごころの確執もかなくなり捨てて称賛の合いの手を発する。

もちろんビッグマンのみが、特権的に演説をしまくるわけではなく、すべての男たちがきわめて押しが強く、猛烈に自己主張するし、そうしなければ男がすたると噂をさる。ビッグマンといえど、そこらのオッサンとなら変わりがない。しかし、男たちの複雑な利害得失にうまく訴えつつ、目ごころの緊張感も緩和させる噂を駆使する雄弁さ、さらにはみなの機微と情感をつかむ時機をみはからつて説得する演技力たるや、さすがビッグマンとうならせるものがある。

「ここではさすがにウイアの派閥の男たちも苦笑する。ウイアの娘が浮気者であることはよく知られていることだから

「われら一族は」いまは小さな双葉とても小さな双葉、やがて幹をたて、枝葉をのぼしてゆく大地に根をはり、枝葉をのぼしてゆく幹と枝葉は、天に、天に、届くであろう。天を、天を、衝くであろう」

こうして最高潮に達した部族の一体感の余韻が、ビッグマンの名声をゆるぎないものにする。

最後の白人ハイトロールオフィサー臨席下、土地紛争の裁判に臨んで証言するビッグマン。ハイトロールオフィサーが仲裁に入っても、まず紛争の決断はつかない。1978年10月、ワペナマダ



土地の境界争いで、この若手の2人が、部族集会で論争中。1984年8月、サカ谷アマコス



最後の白人ハイトロールオフィサー臨席下、土地紛争の裁判に臨んで証言するビッグマン。ハイトロールオフィサーが仲裁に入っても、まず紛争の決断はつかない。1978年10月、ワペナマダ

「われら一族は」いまは小さな双葉とても小さな双葉、やがて幹をたて、枝葉をのぼしてゆく大地に根をはり、枝葉をのぼしてゆく幹と枝葉は、天に、天に、届くであろう。天を、天を、衝くであろう」

街角はしゃべり場

イタリア

宇田川 妙子

うたがわ たきこ

先端人類科学研究部

イタリアは、広場をはじめとする戸外の空間が魅力的に整備されている国として知られている。イタリアを旅行して、広場の美しさに目を奪われた人は少なくないだろう。しかし、そこは彼らにとり、おしゃべりの場でもあることを忘れてはならない。

彼らは、暇さえあれば戸外に出て人と会い、おしゃべりする。たとえば男は、仕事を終えて帰宅すると、そのまま家で過ごすのではなく、広場に出て友人たちと会話を交わすのが日課だし、女は、家事の合間に、路地で近所の女たちと話を花を咲かせる。そして、仕事の合間にオフィスから抜け出て立ち話をしている人、買い物途中で話しこむ人、自動車の窓越しに話はずんて後続車からクラクションを鳴らされている人などなど。広場をはじめとするイタリアの戸外空間とは、こうした人と人とのコミニケーションの場として作り上げられてきたともいえるだろう。イタリアは、「世界でもっとも狭い寝室(家)をもつ代わりに、もっとも広いサロン(広場)をもつ」といわれるゆえである。

やべつばかりで仕事をしないというネガティブな評価が、せいぜい、陽気なおしゃべり好きというイタリア人像で説明されるにとどまっている。彼ら自身も、おしゃべりは単なる暇つぶしにすぎないという。また、イタリアはコネ社会ゆえ、こうした会話が、情報や縁故を探す手段になっているという面もある。

しかし、彼らのおしゃべりには、もっと積極的な意味もある。そこでは、職探しのような個人的な問題から、町おこしや育児・高齢者問題のようなコミュニティの問題まで、さまざまな課題が話し合われ、その会話をきっかけに、諸々の相互扶助や組織が生まれたりする。近年イタリアでは、ボランティア活動やNPO組織が非常に盛んになっているが、その動きは、以上のような戸外での会話の延長線上にある。イタリア人は自分勝手だと言われることが多いが、互いの生活に深い配慮や関心をもっており、その配慮とは、戸外でのおしゃべりの積み重ねのなかで育まれているのである。

また、こうしたおしゃべりは、当然、彼ら一人ひとりにとって、欠かすことのできない楽しみでもある。

彼らもしばしば、毎日戸外に出るのは面倒だとほやく。しかし帰宅すると、わずかな時間でも外出しようと、再度身だしなみを整えるし、いったん外に出れば、さまざまな人を相手に生き生きとおしゃべりを繰り広げはじめる。彼らが「ジェスチャーたっぷり」に、相手の関心を引くよう話をしている様子は、さながら広場や路地を舞台にした俳優のようだ。そこでの会話の上手・下手が、彼・彼女の評判につながることも少な



仕事の合間に広場で話しこむ男たち



教会前広場に集まる人びと

くない。つまり、彼らは戸外で、知り合いという観客たちを前にして、自分をどう見せるかという演技にいそしみながら、自分を表出する喜びを感じているのである。

とするならば、この楽しみとは、決して電話やメールに代えられないものである。実際、携帯やメールが普及している今日でも、彼らは相変わらず、おしゃべりの場を求めて、毎日外出を繰り返し、街中をおしゃべりで彩っている。

女のねたみ解消法

北インド

菅野 美佐子

かのみみこ

総合研究大学院大学文化科学研究科

慎ましやかで真節、そして恋愛に満ちた女性。インドでは一般に、こうした資質を兼ねそなえた女性がよしとされている。だが、インドの村に滞在してみると、その女性像と実際の女性たちとのギャップに困惑することもしばしばであった。

北インドはヒンドゥーの聖地として知られる、ワラーナサイ近郊の農村。田園風景が広がるのどかな情景とは似つかず、村人はあらっばい性格である。話をするときも、男女ともに身振り手振りをふんだんにつかい、喧嘩と見まがうほどに大声、かつ早口である。女性のおしゃべりにも、慎ましやかさなどほとんど感じられない。

とりわけ、村の女性たちはほうわき話が好きである。この地域の農村では兄弟同士が同じ敷地内に居住する合同家族が多いが、その嫁たちが集まると必ずうわさ話に花が咲く。夕方、少し手が空いてくる午後四時から五時ごろ、嫁たちが台所に集まり、チャイを片手におしゃべりが始まる。夕飯の下ごしらえに取りかかりながらも、一瞬たりとも沈黙することはない。早口で大き

な声が軽快に飛び交う。

「ムニはサリーを二五〇ルピーで買ったらいけど、あのサリーなら二〇〇ルピーもしないよ。あたしにはサリーをうお金すらないけどね」

「ラクシメの家の夕飯のサブジー(おかず)は、昨日畑でとったパイアヤカも売れないねえ。それにしても、お裾分けもよこさないやつがあるかい? うちは今夜も貧しくトマトとジャガイモのサブジーだけだよ」

「昨日ギータの家に職場の上司が来ていたらしいよ。男となれなれしく話すなんてねえ。あたしには仕事すらないて言うのに」

うわさといつても話題にのぼるのは些細な出来事である。それに対してけちをつけたり、いやみを言ってみたり。私はこの類の話にうんざりしながらも、何度も話にまぎらいつつ、このおしゃべりの意味について考えてみた。彼女たちは、「浪費家」、「けち」、「男性と話をする浮ら」な女性たちを非難する傍ら、自分はそのような女性ではないことを暗に主張している。それはすなわち、他者を否定することで、冒頭で述べたよ



風通しのよい家の入り口でおしゃべりを楽しむ村の女性



庭先に集まり、女性たちが話しこんでいる。撮影(上・下):八木祐子

うな「慎ましく」、「貞淑」で「気前のよい」理想的な女性を自ら演出し、女性としての自己を肯定することにつながっているのではないか。悪口ともとれるうわさ話は、サリーも、仕事も、パイアヤさえも手に入らない自分を、標的とする女性たちより優位な立場へと転換させる役割をはたしているのかも

れない。同時にねたみや不満を解消させるための手段となっているともいえる。だとしたら、これほど簡単に都合のよい方法はないだろう。

そう考えると、村の女性たちのうわさ好きにも納得がいく。彼女たちの日常にこうしたおしゃべりが欠かせないのだから、ということも。